資 料

助産師が実践するいのちの教育からの児童生徒の学び

Learning outcome of school children from lessons of life given by midwives

松 井 弘 美 (Hiromi MATSUI) *
工 藤 里 香 (Rika KUDO) *
村 田 美代子 (Miyoko MURATA) *
小 林 絵里子 (Eriko KOBAYASHI) *
岡 田 麻 代 (Asayo OKADA) *

抄 録

目 的

助産師が実践するいのちの教育における児童生徒の学びの内容を明らかにする。

対象と方法

X県においていのちの教育の運営を行っている教育行政機関および保健行政機関が保有している既に匿名化された助産師のいのちの教育後の児童生徒の感想文をデータとした。教育行政機関は小学生・中学生、保健行政機関は中学生のデータであった。分析はテキストマイニング技法を活用した。2機関の運営するいのちの教育の内容が異なっていたことより、機関別にデータの分析を行った。テキスト型データを処理し構成要素群を抽出した。構成要素のうち頻度5以上を対象にクラスター分析を行った。クラスターの構成要素からサンプル検索により、クラスターの意味を研究者間で検討した。教育内容を質的変数とし、クラスターと同時に布置し学びの特徴を分析した。

結 果

小学生の学びは、【赤ちゃんに触れて色々感じた】【愛情を受けて育った自分に気づく】【母親のお腹にいた自分を感じた】など7つのクラスターが抽出された。中学生の学びは、A教育行政機関では【自分の将来を考える】【赤ちゃんのアンビバレンスを感じる】【周囲の愛情を実感する】など6つのクラスター、B保健行政機関では【自分の将来を考える】【命の大切さに気づく】【愛情を受けて育った自分に気づく】など6つのクラスターがそれぞれ抽出された。教育内容とクラスターの布置図より、小学生においては乳児と触れ合う体験が最も学びに結びついていた。

結 論

助産師が実践するいのちの教育からの小学生の学びは、自分の命の大切さの実感が中心であった。中学生の学びは、自分のみならず他者を含めた命の大切さの実感と、自分の将来への思考が中心となっていた。

キーワード：いのちの教育，助産師，児童生徒，学び，テキストマイニング

* 富山県立大学 (Faculty of Nursing, Toyama Prefectural University)

2020年7月10日受付 2021年8月29日採用 2021年12月28日公開

Abstract

Purpose

The objective of this study is to clarify the contents of learning of school children from lessons of life given by midwives

Methods

Essays written by school children after receiving lessons of life given by anonymous midwives owned by the educational administration body and health administration body that manage lessons on life were used as data. Data from the educational administration body consisted of data from elementary and middle school students while data from the health administration body consisted of data from middle school students. Analysis was carried out using the text mining method. Due to differing contents in the lessons of life managed by the two bodies, data analysis was carried out according to the body. Text-type data was processed and component groups were extracted. Of the components, cluster analysis was carried out for those with occurrence frequency of 5 times or more. By making a sample search from the components of the clusters, the researchers considered the meaning of the clusters. Characteristics of learning were analyzed by setting the contents of learning as the qualitative variable and forming clusters and arranging them at the same time.

Results

7 clusters were extracted from elementary school students were: 【Experiencing of various emotions after touching a baby】 【Recognition of having been raised with much affection】 【Feeling of having been in my mother's womb】, etc. The 6 clusters extracted from the learning of middle school students according to the A educational administration body were: 【Thoughts about one's future】 【Feeling the ambivalence of babies】 【Realization of affection shown by people around oneself】, etc. while the 6 clusters extracted from the B health administration body were: 【Thoughts about one's future】 【Recognition of the value of life】 【Recognition of having been raised with much affection】, etc. By examining the contents of learning and the cluster arrangement diagram, the experience of coming in contact with babies was most closely associated with learning for elementary school children.

Conclusion

The main lesson acquired by elementary school students from lessons of life given by midwives was the realization of the value of one's life. The main lesson acquired by middle school students was the value of other people's lives as well as one's own, in addition to thoughts about one's future.

Key words: lessons of life, midwives, school children, learning, text mining

1. 緒 言

本邦では、児童生徒が起こす暴力行為の増加および凶悪・粗暴な少年非行の発生状況を踏まえ、2000年に当時の文部省より、いのちの教育の必要性が通達された(文部科学省, 2000)。しかし、その後も続く児童生徒による重大な問題行動の発生から、学校教育では命を大切に教育の充実を重要課題の一つ(文部科学省, 2005)として現在まで取り組まれてきた。

このような状況の中、助産師は生命の誕生に立ち会う専門職の立場から、いのちの教育の一部を担ってきた。子どもたちに「いのちの大切さ」を実感してもらうには、助産師が臨床のドラマを語ることは、有用であるとされ(齋藤, 2008)、実践報告においても、いのちの重みの実感、生の価値観の形成、自己決定や今後の行動を考えるきっかけとなった(上野他, 2011)と報告されている。

一方、いのちの教育の問題として、教育の実践方法が十分に確立されていないことが挙げられる(山内, 2007)。助産師によるいのちの教育においては統一された教育プログラムはなく、教育内容は助産師の力量に委ねられている現状といえる。また、「いのちの教育」を通し、子どもたちがどのようにいのちの大切さを学び、そこから種々の社会問題に対処し得るのかも明らかとはなっていない(吉備他, 2020)。そこで本研究は、現行の助産師が実践するいのちの教育における児童生徒の学びの内容を明らかにし、助産師が実践するいのちの教育の教育内容および教育方法を検討するための基礎的資料とすることを目的とした。

〈用語の定義〉

いのちの教育は、助産師の立場から、児童生徒にいのちの大切さについて教えることとした。学びは、Marzanoの学習の次元(石井, 2005)を参考に、学習

の動機づけとなる感情、思考と行動、獲得した知識とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

テキストマイニング法を用いた混合法とし、探索的順次デザインを採用した。

2. 研究協力機関

研究協力機関は、X県内においていのちの教育の運営を行っているA教育行政機関およびB保健行政機関の2か所である。A教育行政機関は、X県助産師会に講師を依頼し、依頼を受けた助産師会に所属する助産師がいのちの教育を担当している。B保健行政機関では、直接開業助産師に講師を依頼し、開業助産師がいのちの教育を担当している。

3. データ収集方法

研究協力機関が保有している既に匿名化された助産師のいのちの教育後の児童生徒の感想文を研究データとした。感想文は、いのちの教育受講後に感じたり、考えたことを自由記載するように児童生徒に提示されたものである。A教育行政機関の保有する過去4年分の小学生、中学生の感想文、B保健行政機関の保有する過去2年分の中学生の感想文を対象とした。

4. 分析方法

テキストマイニング法により分析を行った。分析にはテキスト型データの分析に対応しているコンピュータソフト Word Miner1.5を活用した。A教育行政機関、B保健行政機関で運営しているいのちの教育内容が異なっていることより、機関別にデータの分析を行った。具体的分析方法は以下の通りである。

1) 分かち書き・キーワード

使用ソフトの「分かち書き」機能により、長文を助詞、記号、単語に分解した。この際、繰り返し出てくる語のまとまり、例えば「お母さんに感謝」「お母さんはすごい」は、意味のあるものとして分かち書き回避記号を用いて括り、成句とした。さらに意味解釈上不要な句読点、助詞、特殊記号を除いたキーワードデータを編集し、構成要素を抽出した。

2) データの編集

解析対象の構成要素を整理し、同種の語を一つの語

に置換する置換辞書を作成し、語の統一を行った。例えば、驚いた、おどろいた、びっくりは「驚いた」、私達、私たち、僕たちは「私達」に置換した。また、分析対象外としたい語を指定して削除辞書を作成した。例えば「ちゃんと」「なんか」「ふうな」という助詞、副助詞、接尾語などを削除とした。以上の作業を経てテキスト型データとした。

3) データ解析

- ① 得られたテキスト型データを処理し、構成要素群を抽出した。構成要素のうち頻度5以上を対象にクラスター分析を行った。
- ② 各クラスターの構成要素からサンプル検索により、クラスターの意味を研究者間で検討し、クラスター名を付与した。
- ③ 教育内容が異なる場合は教育内容を質的変数とし、対応分析により、クラスターと同時にポジショニングする布置図を作成し、各クラスター及び教育内容の相対的な遠近、位置関係から学びの特徴を分析した。教育内容が統一されている場合は対応分析により、各クラスターをポジショニングする布置図を作成し、各クラスターの位置関係から学びの特徴を分析した。布置図では、偏りが小さく、回答件数が多いものが原点近くに、偏りの大きいものは原点から遠くに位置する。また、相互に類似性があるものは近くに、類似性がないものは遠くに位置する(菅, 2007)。

5. 倫理的配慮

本研究は研究協力機関(情報提供機関)に保有されている匿名化された既存資料を研究対象とした。研究協力機関に、データの利用目的、方法、利用項目、情報の管理およびに研究参加に同意後の同意撤回について書面と口頭で明確に説明した。データの管理においては、個人情報保護法ガイドライン(匿名加工情報編)に基づく安全管理を遵守した。本研究は富山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した(看護第R1-19号)。

III. 結果

1. 研究協力機関が運営するいのちの教育の概要

1) A教育行政機関

対象は小学2年生から中学3年生であった。小学生の学年別では5年生での実施が最も多く、次いで4年

生であった。中学生は中学2年生と3年生での実施が同数であった。教育内容には、小学生においては講義(いのちの始まりについて知ろう)、赤ちゃんとの触れ合い体験、妊婦との触れ合い体験、妊婦ジャケット着用による妊婦体験、赤ちゃん人形の抱っこ体験、家族からの手紙、将来の自分への手紙があり、各担当助産師によって様々に組み合わせ12通りの教育内容を実施していた。中学生では、講義(生命の誕生)及び赤ちゃんとの触れ合い体験に統一されていた。

2) B保健行政機関

対象は中学2年生であった。教育内容は講義(生きる力を持ち備えて生まれてきた自分、待ち望まれて生まれてきた自分)及び赤ちゃんとの触れ合い体験、ライフプランの講義及び作成の2つの教育内容を実施していた。

2. 助産師が実践するいのちの教育からの学び

研究協力機関が運営するいのちの教育内容が異なっていたことより、機関別にテキストデータとし、学びの内容を分析した。さらにA教育行政機関においては小学2年生から中学3年生を対象としていたことより、小学生、中学生に分けて分析した。

1) クラスター分析の結果

結果の表示において【 】はクラスター名、「 」は児童生徒の感想内容を示す。

① A教育行政機関の運営するいのちの教育からの小学生の学び

テキストデータから抽出された構成要素は6,423, 句読点, 助詞, 特殊記号などを除き, 同一語の置換及び削除などのデータ編後の構成要素は1,881, 学びの特徴を明らかにする目的で出現頻度5以上の構成要素1,150の分析を行った。

構成要素のクラスター分析の結果, 7つのクラスターが抽出された(表1)。クラスター1は, お母さん, 赤ちゃんを抱っこなどの構成要素から成っていた。「赤ちゃんを抱っこするとすぐ泣いた」「赤ちゃんを抱っこしたら思ったより重かった」など, 赤ちゃんとの触れ合いを通して感じた内容であり, 【赤ちゃんに触れて色々感じた】とした。クラスター2は, 命の大切さ, 良かったなどの構成要素から成り, 「一番心に残ったのは命の大切さ」「お腹の中にいる時のことを知ることができて良かった」などの記載から【学びに満足する】とした。クラスター3は, 成長する, 沢山のの人に支えられてきたなどの構成要素から成り, 「小

さな受精卵がすくすく成長して今の自分がいる」「家族や友だち, 沢山のの人に支えられてきたと感じた」などの内容であり【他者に支えられている】とした。クラスター4は, 私が生まれるまでの構成要素から成り, 「お母さんは, 私が生まれるまで大変な思いをしていた」などの内容であり【私が生まれるまでのことが分かった】とした。クラスター5は, お母さんに感謝, 赤ちゃんに触れ合うなどの構成要素から成り, 「自分を産んでくれたお母さんに感謝したい」「赤ちゃんに触れ合うことで, これまでより家族を大切にしようと思った」など体験を通して感じたことを記載しており【体験を通して様々な気持ちが生じた】とした。クラスター6は, 愛情を注がれて, 自分の命を大切になどの構成要素から成り, 「沢山の愛情を注がれて大切に育ててくれた」「自分の命を大切に, 親に感謝して生きていきたい」などの記載から【愛情を受けて育った自分に気づく】とした。クラスター7は, 私がお腹の中にいた時, 生まれた時などの構成要素から成り, 「私がお腹の中にいた時, 優しく話かけてくれていた」「生まれた時, お母さんだけでなく, 赤ちゃんも頑張ったと聞いて, 私も頑張ったと思った」などの記載から【母親のお腹にいた自分を感じた】とした。

② A教育行政機関の運営するいのちの教育からの中学生の学び

テキストデータから抽出された構成要素は3,492, 句読点, 助詞, 特殊記号などを除き, 同一語の置換及び削除などのデータ編後の構成要素は940, 学びの特徴を明らかにする目的で出現頻度5以上の構成要素838の分析を行った。

構成要素のクラスター分析の結果, 6つのクラスターが抽出された(表2)。クラスター1は, 子ども, 将来などの構成要素から成っていた。「将来自分に子どもができたなら, しっかりと世話をして色々話しかける」「将来自分に合った人と結婚し, 幸せな家庭を築こうと思った」などの記載から【自分の将来を考える】とした。クラスター2は, 育児は大変, 可愛いなどの構成要素から成り, 「子ども中心の生活で, 夜も育児は大変」「赤ちゃんは可愛い, 癒された」などの記載から【赤ちゃんのアンビバレンスを感じる】とした。クラスター3は, 愛情を注がれて, 私もこのようになどの構成要素から成り, 「自分は愛情を注がれて, 大切に育てられたと分かった」「私もこのように大切に育ててくれたと思うと嬉しかった」などの内容であり

表1 A教育行政機関が運営するいのちの教育からの小学生の学び

クラスター1 赤ちゃんに触れて色々感じた	クラスター2 学びに満足する	クラスター3 他者に支えられている	クラスター4 自分が生まれるまでのことが分かった	クラスター5 体験を通して様々な気持ちが生じた	クラスター6 愛情を受けて育った自分に気づく	クラスター7 母親のお腹にいた自分を感じた
お母さん	お腹の中	私達	私が生まれるまで	いろいろ	おかげ	0.1mm
お母さんはすごい	とても小さい	小さな受精卵		お母さんに感謝	お父さんお母さん	ありがとう
お母さんは大変	知った	成長する		温かい	これから	頑張った
感じた	命の大切さ	生まれてきた		可愛い	たった一つの命	産んでくれた
嬉しかった	良かった	生まれる		気持ち	みんな	私
泣いたり		沢山のの人に支えられてきた		自分の命	愛情を注がれて	私がお腹の中にいた時
驚いた		命		柔らかい	育ててくれた	生まれた時
思った				将来	育児は大変	赤ちゃんがお腹の中にいた時
私もこのように				赤ちゃんに触れ合う	一生懸命	沢山
思い				大人になったら	家族	
赤ちゃん				痛みに耐えて	家族に感謝	
赤ちゃんが欲しい				伝えたい	改めて	
赤ちゃんを抱っこ					学んだ	
赤ちゃん人形					元気である	
大きくなる					今の自分がいる	
大変な思い					産む時	
分かった					自分	
命の繋がりに					自分の命を大切に	
命の始まり					初めて	
					親に感謝	
					生きていきたい	
					生きていく	
					生まれてきた奇跡	
					生命の誕生	
					大切に育ててくれた	

【周囲の愛情を実感する】とした。クラスター4は、改めて、赤ちゃんを抱っこなどの構成要素から成り、「どんどん成長して、私のように大きくなるのだと改めて感じた」「赤ちゃんを抱っこした時戸惑ったが、だんだん笑ってくれたので嬉しかった」などの内容であり【体験を通して様々な気持ちが生じた】とした。クラスター5は、産んでくれた、沢山のの人に支えられてきたなどの構成要素から成り、「大変な思いをして自分のことを産んでくれたお母さんや支えてくれたお父さんがいたから今の自分がいる」「自分がここまで成長したのは沢山のの人に支えられてきたからだ」などの記載から【他者に支えられている】とした。クラスター6は、気持ち、大人になったらの構成要素から成り、「大人になったら、この気持ちを忘れないでいた

い」「大人になったら、自分が新しい命を守っていく」などの記載から【大人になった自分をイメージする】とした。

③ B保健行政機関の運営するいのちの教育からの中学生の学び

テキストデータから抽出された構成要素は10,461、句読点、助詞、特殊記号などを除き、同一語の置換及び削除などのデータ編後の構成要素は3,127、学びの特徴を明らかにする目的で出現頻度5以上の構成要素2,161の分析を行った。

構成要素のクラスター分析の結果、6つのクラスターが抽出された(表3)。クラスター1は、自分で決める、自分の将来などの構成要素から成っていた。「自分の人生は自分で決める」「自分の将来を考えるこ

表2 A教育行政機関が運営するいのちの教育からの中学生の学び

クラスター1 自分の将来を考える	クラスター2 赤ちゃんのアンビバレンスを感じる	クラスター3 周囲の愛情を実感する	クラスター4 体験を通して様々な気持ちが生じた	クラスター5 他者に支えられている	クラスター6 大人になった自分をイメージする
お母さん	育児は大変	すごく	これから	今	気持ち
子ども	可愛い	みんな笑顔	育ててくれた	産んでくれた	大人になったら
出産	赤ちゃん	愛情を注がれて	改めて	沢山の人の支えられてきた	
将来	赤ちゃんに触れ合う	私もこのように	感じた	知った	
大切	分かった		嬉しかった	命の大切さ	
大切に育ててくれた			子どもができた		
大変			思った		
沢山			私		
			時		
			自分		
			親		
			親に感謝		
			人		
			赤ちゃんを抱っこ		

とは大事」などの記載から【自分の将来を考える】とした。クラスター2は、お金がいる、生活などの構成要素から成り、「育児にはお金があるので、しっかりお金を貯めて子どもを作ったほうがよい」「将来は安定した生活を送りたい」などの記載から【自分の生活を考える】とした。クラスター3は、学んだ、重要ななどの構成要素から成り、「人生が変化するかもしれないことを学んだ」「自分の人生を考える重要な機会だった」などの内容であり【ライフプランは重要と思う】とした。クラスター4は、自分の命、他人の命などの構成要素から成り、「自分の命を大切にしようと思った」「他人の命も大切にしていきたい」などの内容であり【命の大切さに気づく】とした。クラスター5は、お母さんの苦勞、成長などの構成要素から成り、「お母さんに育児の話を聞いて、お母さんの苦勞を知った」「お母さんは命を授かってから成長するまで、苦勞を重ねてきた」などの記載から【愛情を受けて育った自分に気づく】とした。クラスター6は、お母さんの喜び、赤ちゃんは宝物などの構成要素から成り、「育児は大変だが、お母さんの喜びなどが分かった」「お母さんにとって赤ちゃんは宝物なので大きく育ててほしい」などの記載から【母子の繋がりをを感じる】とした。

2) 対応分析の結果

次に教育内容による学びの特徴を分析するために、

対応分析を行った。〈 〉は教育内容を示す。

① A教育行政機関の運営するいのちの教育からの小学生の学びの特徴

教育内容とクラスターを同時に布置した(図1)。成分1の固有値は0.76, 成分2の固有値は0.73であった。教育内容は、原点付近に〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験〉〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験+妊婦体験+家族からの手紙〉〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験+妊婦体験〉〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験+将来の自分への手紙〉〈講義+赤ちゃんとの触れ合い+妊婦との触れ合い+妊婦体験〉の5つが布置された。学びについては、クラスター1【赤ちゃんに触れて色々感じた】、クラスター5【体験を通して様々な気持ちが生じた】、クラスター6【愛情を受けて育った自分に気づく】が原点に布置された。成分1(X軸)の負の位置、成分2(Y軸)の正の位置に、〈講義+家族からの手紙〉〈講義+妊婦体験+家族からの手紙〉の教育内容が布置された。この近くに学びとしてクラスター4【自分が生まれるまでのことが分かった】、クラスター7【母親のお腹にいた自分を感じた】が位置していた。

また、成分2(Y軸)の負の位置に、〈講義+赤ちゃんとの触れ合い+妊婦との触れ合い〉の教育内容が布置され、この近くに学びとしてクラスター2【学びに満足する】、クラスター3【他者に支えられている】が布置された。

表3 B保健行政機関が運営するいのちの教育からの中学生の学び

クラスター1 自分の将来を考 える	クラスター2 自分の生活を考 える	クラスター3 ライフプランは重 要と思う	クラスター4 命の大切さに気 づく	クラスター5 愛情を受けて育っ た自分に気づく	クラスター6 母子の繋がりを感 じる
この先	お金がいる	家族に感謝	お母さんは幸せそ う	育児	1人1人かけがえの ない存在
しっかり立て	家	学んだ	安心	感じた	3時間おき
やりたいこと	楽しかった	子どもができた	気づいた	お母さんの苦勞	お母さんと赤ちゃ んに触れ合う
イメージ	自分の子ども	自分の大切さ	驚いた	親に感謝	お母さんに感謝
ライフプラン	自分を大切に	重要	思った	成長	お母さんの喜び
一度の人生	生きていきたい	将来結婚	自分の命	責任を持つ	お母さんはすごい
頑張りたい	生活	大事	出産	体験	お母さんは頑張っ ている
後悔のない人生	勉強		乗り越えて	妊娠	お母さんは大変
考えたことがな かった			親	不安	お父さんのサポー ト
考えることがで きた			赤ちゃんがお腹の 中にいる時	分かった	みんなが笑顔
考えることが大 事			赤ちゃんが欲しい	良い体験	愛情を注がれて
自分で決める			他人の命		育児は大変
自分のやりたいこ と			命の繋がり		恩返ししたい
自分の将来			命の大切さ		温かい
自分の人生					喜びも沢山ある
自分の生き方					生まれてきた奇跡
自分の理想					泣き止んだ
就職					緊張した
充実した人生					言葉が話せない
人生は大切					私もこのように
人生は短い					自分が生きている こと
人生は長い					自分がしたいこと もできない
人生を大切に					手や足が小さい
予定通りにいかな い					首がすわっていない
					柔らかい
					寝れない
					辛い事
					人間の力はすごい
					赤ちゃんの成長
					赤ちゃんはお母さ んが大好き
					赤ちゃんはすごい
					赤ちゃんは可愛い
					赤ちゃんは重い
					赤ちゃんは宝物
					赤ちゃんを産むの は大変
					赤ちゃんを抱っこ
					大切に育てられた
					沢山の人の支えら れてきた
					当たり前ではない
					癒される
					命がけ

※ □内の数字は教育内容の組み合わせを示す

教育内容

- 1 講義
- 2 赤ちゃんとの触れ合い体験
- 3 妊婦との触れ合い体験
- 4 妊婦体験
- 5 赤ちゃん人形の抱っこ体験
- 6 将来の自分への手紙
- 7 家族からの手紙

図1 A教育行政機関のいのちの教育内容と小学生の学びのクラスターの布置図

② A教育行政機関の運営するいのちの教育からの中
学生の学びの特徴

教育内容が統一されていたことより、学びの特徴を

分析するために各クラスターの関係を布置した(図2)。成分1の固有値は0.79, 成分2の固有値は0.72であった。原点にはクラスター4【体験を通して様々

図2 A教育行政機関のいのちの教育からの中学生の学びのクラスターの布置図

な気持ちが生じた】、クラスター1【自分の将来を考える】、クラスター2【赤ちゃんのアンビバレンスを感じる】が布置された。成分2 (Y軸) の正の位置に、クラスター5【他者に支えられている】、負の位置にクラスター3【周囲の愛情を実感する】が位置していた。クラスター6【大人になった自分をイメージする】は、他のクラスターとは離れた成分1 (X軸) の負の位置に布置された。

③ B保健行政機関の運営するいのちの教育からの中学生の学びの特徴

教育内容とクラスターを同時に布置した (図3)。成

分1の固有値は0.67、成分2の固有値は0.66であった。

2つの教育内容は、成分2 (Y軸) の正と負の位置に離れて布置された。正の位置には、〈講義＋ライフプラン作成〉が布置された。同じく成分2 (Y軸) の正の位置に学びとしてクラスター1【自分の将来を考える】、クラスター2【自分の生活を考える】、クラスター3【ライフプランは重要と思う】が布置された。成分2 (Y軸) の負の位置に〈講義＋赤ちゃんとの触れ合い体験〉が布置された。同じく成分2 (Y軸) の負の位置に学びとしてクラスター5【愛情を受けて育った自分に気づく】、クラスター6【母子の繋がりをを感じる】が布

※ □ 内の数字は教育内容を示す

教育内容は 1・2 の組み合わせ

- 1 講義＋赤ちゃんとの触れ合い体験
- 2 講義＋ライフプラン作成

図3 B保健行政機関のいのちの教育内容と中学生の学びのクラスターの布置図

置された。原点には、学びとしてクラスター4【命の大切さに気づく】が布置された。

IV. 考 察

1. 助産師が実践するいのちの教育からの児童生徒の学び

助産師によるいのちの教育後の感想文の分析結果より、小学生、中学生の学びについて考察する。

1) 小学生の学び

小学生のいのちの教育からの学びは、図1より、クラスター1【赤ちゃんに触れて色々感じた】、クラスター5【体験を通して様々な気持ちが生じた】、クラスター6【愛情を受けて育った自分に気づく】が原点近くに位置していた。回答件数が多いものが原点近くに位置する(菅, 2007) ことより、この3つが学びの中心であるといえる。教育内容をみると、原点に布置された5つの教育内容に共通していたのは〈赤ちゃんとの

触れ合い体験〉であった。助産師はいのちの教育において様々な教育内容を組み合わせてはいるが、乳児と触れ合う体験が最も小学生の学びに関連していたと考えられる。小学生は、実際に乳児の泣き声を聞き、乳児を抱くことで、すぐ泣いてしまうことやその重さに驚いていた。心から実感する体験とは、見る、聴く、触れるなどの身体を通しての五感が出発点となる(近藤, 2008)。まさしく、〈赤ちゃんとの触れ合い体験〉はいのちを実感する体験であったといえる。実施時期が認知発達面では具体的操作期に該当することより(田島他, 2016)、具体的対象である乳児と触れ合うことは、効果的であったと考えられる。

また、原点から離れているが、〈講義+家族からの手紙〉〈講義+妊婦体験+家族からの手紙〉の教育内容の近くに、クラスター4【自分が生まれるまでのことが分かった】、クラスター7【母親のお腹にいた自分を感じた】が布置されていた。同じく原点から離れているが、〈講義+赤ちゃんとの触れ合い+妊婦との触れ合い〉の教育内容の近くに、クラスター3【他者に支えられている】が位置していた。自分が生まれてくるまでのことを家族から聞くことや、妊婦体験や実際の妊婦と触れ合うことから、自分も赤ちゃんと同様にお腹の中にいたことを感じ、自分一人で成長したのではなく、他者に支えられているいのちであることも自覚したと推察される。いのちを教えることが可能になるのは、対象認識としてではなく子どもが自分のこととして、自分の中のいのちと響き合う時であり(大西, 1996)、いのちを自分の目線で考える過程が大切である(三輪, 2012)と言われている。この点で、小学生は赤ちゃんという第三者の命を実感する体験に加え、家族の話を書くことや、体内に生命を宿している妊婦との触れ合いや疑似体験は、同じ命をもつ自分に向き合い、自分の命の大切さを感じることに繋がると考えられる。

2) 中学生の学び

A教育行政機関、B保健行政機関の教育内容は異なっていることより別に分析を行った。

A教育行政機関による中学生のいのちの教育からの学びは、図2より、クラスター4【体験を通して様々な気持ちが生じた】、クラスター1【自分の将来を考える】、クラスター2【赤ちゃんのアンビバレンスを感じる】が原点近くに位置していることより、この3つが学びの中心であるといえる。教育内容は〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験〉に統一されており、この体

験から乳児の可愛さと母親の育児の大変さを感じ取り、自分が将来子どもを持った時のことを想像したと推察される。教育内容は、小学生と同じ〈赤ちゃんとの触れ合い体験〉であるが、実施時期が認知発達面では形式的操作期であることより、対象を全体的に捉え、未来を思考することが可能となり(田島他, 2016)、乳児の持つ両価性や自身の未来について思考することができたといえる。

B保健行政機関による中学生のいのちの教育内容は〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験〉、〈講義+ライフプラン作成〉の2つの内容から構成されていた。図3より、〈講義+赤ちゃんとの触れ合い体験〉から【愛情を受けて育った自分に気づく】【母子のつながりを感じる】、〈講義+ライフプラン作成〉から【ライフプランは重要と思う】【自分の将来を考える】【自分の生活を考える】をそれぞれ学んでいたといえる。そして原点には、クラスター4【命の大切さに気づく】が位置していた。このことは、2つの教育内容からは別々の学びはあるが、これらを通して、自分の命だけでなく他者の命も含めて【命の大切さに気づく】ことができたと考えられる。「命の大切さ」を実感させる教育において、アクセントを置くべきなのは、命と実感であり、実感することで初めて自分のものとなる(「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会, 2007)。乳児の触れ合いとライフプランを作成することで、人生を時間的側面も含めて考え、いのちの大切さを実感したと考えられる。

いのちの教育の目的は、命を大切にすることを育てることであり、その前提は、自己肯定感を持つこと(近藤, 2008)、自尊感情を育むことである(滝沢, 2012)。自己肯定感を持つためには、自分の未来や将来をイメージできる未来志向性が重要とされる(梶田, 2018)。今回、教育内容は異なるがA教育行政機関、B保健行政機関いずれの教育においても、自分の将来を考えており、中学生の自尊感情を高めることに繋がったと考えられる。

3) 小学生と中学生に共通する学び

小学生、中学生共に、学びとして【他者に支えられている】【愛情を受けて育った自分に気づく】というクラスターが抽出された。これは自分の命の存続における他者の存在を感じたといえる。図1, 2, 3から、〈赤ちゃんとの触れ合い体験〉〈妊婦との触れ合い体験〉〈妊婦体験〉など体験型の教育内容がクラスター近くに布置されていた。周りの人に支えられていると実感

できる子は、いのちの大切さを実感できる（住本，2015）ことより，小学生，中学生共にいのちの大切さを実感するには，体験型の教育内容が必要であるといえる。

また，小学生，中学生を通して，驚きや嬉しかったなどの構成要素が見られたことより，いのちの教育を通して児童生徒の感情が動かされていたことが分かった。感情は学習への動機づけとなる（石井，2005）ことから，いのちの教育を通して，命を考える動機づけが高まったといえる。生徒指導提要においては，命の大切さや生きる喜びを実感する場が必要である（文部科学省，2010）とされており，助産師はいのちの教育の実践を通して，小学生，中学生が命を実感できる場を提供しているといえる。

2. 助産師が実践するいのちの教育への示唆

児童生徒の問題行動対策重点プログラム（最終まとめ）において，命の教育には考えや気持ちを伝える，生活上の問題を解決するなど行動レベルでの成果が提示されている（文部科学省，2004）。教育する側においては，子どもたちがいのちの大切さや尊厳の理解に留まるのではなく，その理解を基に，どのような行動がとれるのかを考えた教育が求められている（近藤，2008；高橋，2016）。以上のことより，日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して，建設的かつ効果的に対処する能力として世界保健機構（World Health Organization，以下WHO）が定義するライフスキルの視点から，助産師が実践するいのちの教育について考察する。

結果より，小学生は自分に向き合い，自分の命の大切さを実感できていた。このことは，自分がどのような存在であるかの意識が高まった状況と考えられ，ライフスキルの自己意識といえる。自己意識は他者への共感性を育てるのに不可欠なスキルである（WHO，1994/2012）。共感とは自分とは異なる他者を理解し，受け入れることである。したがって，自分の命の大切さと同じくらい他者の命も大切であることへの理解に発展する教育方法が必要であると考ええる。

中学生は自分の命の大切さを実感することに加え，母親の育児の大変さを感じ取り，乳児の両個性を理解していた。これはライフスキルの共感性による他者の理解といえる。さらに，自身の未来についても思考しており，直接経験しないことについても考えることができるライフスキルの創造的思考といえる。創造的思

考により毎日の生活状況に柔軟に対応することができるようになる（WHO，1994/2012），中学生から問題解決スキルが向上する（高橋，2013）ことより，命の大切さの実感を踏まえ，日常の具体的行動に発展する教育方法が必要であると考ええる。

V. 結 論

助産師が実践するいのちの教育からの小学生の学びは，自分の命の大切さの実感であった。中学生の学びは，自分のみならず他者を含めた命の大切さの実感と，自分の将来への思考であった。助産師がいのちの教育を実践することで，児童生徒はいのちの大切さを実感し，いのちに関する学びへの動機づけが高まることが明らかとなった。

謝 辞

本研究にご協力いただきました研究協力機関の皆様は心より感謝申し上げます。本研究は富山県立大学の2019年度学内外連携研究費の助成を受けて実施した。

利益相反

本研究に関する利益相反はありません。

文 献

- 「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会（2007）.「命の大切さを実感させる教育への提言」.兵庫県教育委員会，2-4.
- 石井英真（2005）. アメリカの思考教授研究における教育目標論の展開：R.J.マルザーノの「学習の次元」の検討を中心に. 京都大学大学院教育学研究科紀要，51，302-315.
- 梶田叡一（2018）. いのちの教育のために. pp.103-105，東京：金子書房.
- 菅民郎（2007）. 多変量解析の実践 下. pp.117-144，京都：現代数学社.
- 吉備智史，池田真理，上別府圭子（2020）. 子どもに対する「いのちの教育」の内容とその実践に関する専門家インタビューの質的分析. 小児保健研究，79(1)，83-91.
- 近藤靖宏（2008）. いのちの教育の充実を願って. 江南大学教職教育センター年報・研究報告書，49-51.
- 三輪壽江（2012）. 生命誕生からいのちを伝える. 思春期学，30(4)，354-357.

- 文部科学省 (2000). 平成12年度 我が国の文教施策 [第2部 第2章 第2節1] https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001/hpad200001_2_166.html (アクセス2020.3.13)
- 文部科学省 (2004). 児童生徒の問題行動対策重点プログラム (最終まとめ, 全文). 教育公論社, (866), 35-44.
- 文部科学省 (2005). 平成17年版 文部科学白書 [第2部第2章第1節3] https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpba200501/002/002/0202.htm (アクセス2020.3.13)
- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm (アクセス2020.3.13)
- 大西正倫 (1996). いのちの教育の必要性と困難性. 日本教育学会大会研究発表要項, 55(1), 54-59.
- 齋藤益子 (2008). 「助産師が伝える性教育」助産師だから伝えたい, いのちの教育, 62(8), 674-679.
- 住本克彦 (2015). 小学生・中学生・高校生の「いのち」に対する意識の実態—「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をととして—. 環太平洋大学研究紀要, 9, 159-169.
- 高橋浩之 (2013). 認知的スキル研究と健康教育—健康教育で社会を変える—. 日本健康教育学会誌, 21(4), 326-333.
- 高橋健太郎 (2016). いのちの教育—理想と現実—. 思春期学, 34(1), 10-14.
- 滝沢利直 (2012). 教育における実存的側面についての一考察—「いのちの教育」を手がかりとして—. 東京工芸大学工学部紀要, 35(2), 41-51.
- 田島信元, 岩立志津夫, 長崎勤 (2016). 新・発達心理学ハンドブック. pp.286-291, 東京: 福村出版.
- 上野ひろみ, 松田美千子, 岡本美佐江, 古川洋子 (2011). 勤務助産師, 性教育実践活動「いのちの教育」10年間の変遷—2001年からのふりかえり—. 滋賀母性衛生学会誌, 11, 48-52.
- WHO (1994) / 川畑徹朗, 西岡伸紀, 高石昌弘, 石川哲也 監訳 (2012). WHO ライフスキル教育プログラム. pp.12-16, 東京: 大修館書店.
- 山内隆之 (2007). 命の教育についての一考察—命の教育に関する理念・施策を踏まえた実践論的立場から—. 学校教育研究, 22, 234-246.